様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：２４７３０４７１

研究課題名（和文）ピアサポート機能に注目した認知症家族会の運営マニュアルの開発と評価に関する研究

研究課題名（英文）Research on development and evaluation of operating manual of dementia families association focusing on peer support function

研究代表者
荒井　浩道（Arai, Hiromichi）

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：６０３５０４３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：認知症患者を介護する家族を支援する社会資源として，「認知症家族会」が注目されている．だが近年では，ピアサポート（仲間同士、当事者同士の支え合い）機能が十分に発揮できず，活動が停滞するグループが増加している．認知症家族会のピアサポート機能を十分に発揮するためには，特別なノウハウが必要である．　しかし現状では，各グループは“手探り”で運営を行わなければならず，活動の停滞，グループの解散などの問題をかかえている．こうした背景を踏まえ，本研究では認知症家族会の効果的な運営に寄与するため，ピアサポート機能に注目したマニュアルの開発と評価を行なった．

研究成果の概要（英文）：As a social resource that supports families who care for dementia patients, "dementia families association" attracts attention. However, in recent years, the number of groups where peer support function can not be fully demonstrated and the activity stagnates is increasing. In order to fully demonstrate the peer support function of the dementia families association, special know-how is necessary. However, in the present situation, each group has to manage with " fumble", which has problems such as stagnation of activities and dissolution of the group. Based on this background, in this research, in order to contribute to the effective management of the dementia families association, we developed and evaluated the manual focusing on the peer support function.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ピアサポート　認知症　家族会　ナラティヴ　コラボレイティヴ　オープンダイアローグ

１．研究開始当初の背景

(1) ピアサポートを活用した認知症家族会の重要性

超高齢社会に突入したわが国では，増加する認知症高齢者本人への支援だけでなく，在宅で認知症高齢者を介護する家族（以下,「認知症介護家族」と略記）への支援の必要性が高まっている．認知症になった近親者を介護するということは,「受け入れ難さ（受容困難感)」,「寄る辺なさ（社会的孤立感)」,「先行きのなさ（時間的閉塞感)」などの“特有の困難”を伴う（荒井 2006)．しかしその困難に寄り添い，適切な支援を行うことは専門職であっても容易ではない（荒井 2008)．近年，このような認知症介護家族を支援する社会資源として，ピアサポートを活用した「認知症家族会」の活動が注目を集めている．

認知症家族会は，認知症高齢者を在宅で介護するという当事者同士が支え合う「ピアサポート」として,“当事者ならでは”の支援を可能にしている．先駆的な取り組みとしては，1980 年に発足した公益社団法人認知症の人と家族の会（旧名称社団法人呆け老人をかかえる家族の会）による全国組織の活動がある．また 2006 年以降は，地域包括支援センターを中心に地域単位で組織化されるようになり，その数を急速に増やしている．認知症家族会は，今後一層の増加が予測される認知症高齢者とその家族を地域で支えていくうえで，不可欠な社会資源といえる．

(2) 認知症家族会の運営マニュアル開発の必要性

本研究代表者は，これまでも科研費（平成 15 年度～平成 17 年度，平成 19 年度～平成 22 年度）や民間財団（平成 16 年度～平成 17 年度）の助成を受け，認知症家族会の交流会におけるピアサポート機能の分析を行なってきた．これらの研究を通して得られた知見は，以下の 4 点である．

(a) 司会やベテラン参加者の役割の重要性：認知症家族会の交流会における支援効果は，ファシリテーターとしての司会の力量に大きく左右される．また，交流会の序盤におけるベテラン参加者の発話内容は，中盤以降の新規参加者の発話内容に大きな影響を与える．

(b) 異質な参加者によるコンフリクト：同じ認知症介護家族であっても抱えている困難に質的な違いがある場合，具体的には，大きな経済格差，要介護者との続柄，認知症の種類が異なる場合（例：アルツハイマー型とピック病）などである．

(c) 専門職，専門機関との連携の重要性：ピアサポートを展開していくうえで，医師や看護師，社会福祉士，介護支援専門員等の専門職や，行政や病院，地域包括支援センター等の専門機関との“適切な連携”を図ることは重要であるが,“過度の依存”は逆効果である．

(d) 認知症家族会がかかえる運営上の課題：新規に認知症家族会を立ち上げる場合や，運営が軌道にのるまでの初期の段階では，多くのグループがピアサポート機能を巡る課題を抱えている．そこではノウハウの蓄積，伝達，共有が必要であるが，現状では十分ではない．

以上の知見から，認知症家族会のピアサポート機能を十分に発揮するためには，特有の高度なノウハウが必要である．しかし現状では各グループは,“手探り”の状態で運営を行わざるをえない．このことから，ピアサポート機能に注目した認知症家族会の運営マニュアルの開発と評価を目指す本研究の意義は大きい．

２．研究の目的

本研究ではピアサポート機能に注目した認知症家族会の運営マニュアルを開発・評価に必要な研究を行う．研究期間内に実施する研究項目は以下のとおりである．

(1) 研究動向の把握

ピアサポート研究に関する国内外の理論的・実践的文献を収集し，ソーシャルワークの観点からレビューする．また認知症ケア・家族支援に関する国内外の理論的・実践的文献を収集し，ナラティヴ・アプローチの観点からレビューする．

(2) 活動実態の把握

認知症家族会の活動実態を把握するため，関東地方全域の自治体や民間団体を対象に電話インタビュー調査，ウェブ調査をとおして網羅的に認知症家族会のリスト化を行う．そのうえでアンケート調査を実施し，活動開始時期，活動頻度，活動場所，活動内容，運営上の課題・ニーズの有無，専門職との連携等について把握する．

(3) 運営上の課題とニーズの把握

認知症家族会の運営上の課題とニーズを把握するため，上述の活動実態調査を踏まえてよりインテンシブな調査を行う．具体的には認知症家族会の代表者 10 名を対象とした個別インタビュー調査，関係者 30 名を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー調査を実施する．この調査から得られたデータをテキストマイニングの手法を用いて分析を行い，課題・ニーズの可視化を図る．

(4) 効果的なピアサポート実践の分析

認知症家族会における効果的な運営支援方法を検討するため，東京都武蔵野市をフィールドとしたアクションリサーチを行う．具体的には，2010 年 4 月に設立された認知症家族会“ほっとカフェ”と“親の家”を活動拠点として，運営支援のあり方，行政や専門職の関与，他の家族会とのネットワークのあり方の分析を行う．

(5) 運営マニュアルの開発と評価

以上の研究項目を踏まえたうえで認知症家族会の運営支援モデルの開発と評価を行う．評価には,「プログラム評価」の手法を用いる．

３．研究の方法

本研究の目的は，認知症家族会の効果的な運営に寄与するため，ピアサポート機能に注目したマニュアルを開発し，その評価を行うことである．本研究では，この目的を達成するため，平成 24 年度から平成 28 年度の 4 年間で，以下の 5 つの研究項目を実施した．

(1) 研究動向の把握
(2) 活動実態の把握
(3) 運営上の課題とニーズの把握
(4) 効果的なピアサポート実践の分析
(5) 運営マニュアルの開発と評価

４．研究成果

平成 24 年度から平成 28 年度までの研究期間における研究成果は，（1）ナラティヴ理論の精微化，（2）運営ノウハウの蓄積，（3）運営マニュアルの開発，（4）研究成果の発表，の 4 点である．

（1）ナラティヴ理論の精激化としては，オープンダイアローグ・アプローチを手がかりに理論的な整理を行った.（2）運営ノウハウの蓄積としては，月 1 回程度開催されている認知症家族会に参加し，参加者の許可を得た上で発言内容をまとめ，発言録を作成した.（3）運営マニュアルの開発としては，オープンダイアローグ・アプローチにおける不確実性への耐性，平場のリフレクティング，ポリフォニックな対話をベースに開発を行なった．

（4）研究成果の発表としては，『ナラティヴ・ソーシャルワーク―"〈支援〉しない支援"の方法』（新泉社，2014 年），「ソーシャルワーカーに『専門性』は必要か？―ビギナーズラックとピアサポートを手がかり」木下大生・後藤広史・本多勇・木村淳也・長沼葉月・荒井浩道著『ソーシャルワーカーのジリツ―自立・自律・而立したワーカーを目指すソーシャルワーク実践』（生活書院，2015 年），「福祉の社会学」松野弘編『現代社会論―社会的課題の分析と解決の方策』（ミネルヴァ書房，2017 年），「ナラティヴ・アプローチにもとづく観察記録の方法―“物語”としての観察，記録」『ソーシャルワーク研究』41(1)，相川書房，42-50.（2015 年 3 月），「テキストマイニングとはなにか―その解析の仕組みと基礎的分析方法」『介護福祉学』22(1)，52-60.（2015 年 4 月），「テキストマイニングの活用とその限界，および注意点」『介護福祉学』22(2)，143-152.（2015 年 10 月），「ケアマネジャーのためのナラティヴ・アプローチ①―ナラティヴ・アプローチとは何か？」『ケアマネジャー』（中央法規出版，2017 年 4 月），「ケアマネジャーのためのナラティヴ・アプローチ②―ナラティヴ・アプローチの実際」（中央法規出版，2017 年 5 月），「ピアサポートの言語的営み―自由な語り，当事者性，技法」荒井浩道・相川章子・濱田由紀「ピアサポート×ナラティヴ―『経験の語り』を差し出すことによる支え合い」（第 5 回ナラティヴ・コロキウム，2017 年 3 月 5 日）などがある．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. 荒井浩道（2017）「ケアマネジャーのためのナラティヴ・アプローチ②―ナラティヴ・アプローチの実際」（中央法規出版，2017 年 5 月）
2. 荒井浩道（2017）「ケアマネジャーのためのナラティヴ・アプローチ①―ナラティヴ・アプローチとは何か？」『ケアマネジャー』（中央法規出版，2017 年 4 月）
3. 荒井浩道（2015）「テキストマイニングの活用とその限界，および注意点」『介護福祉学』22(2)，143-152.（2015 年 10 月）
4. 荒井浩道（2015）「テキストマイニングとはなにか―その解析の仕組みと基礎的分析方法」『介護福祉学』22(1)，52-60.（2015 年 4 月）
5. 荒井浩道（2015）「ナラティヴ・アプローチにもとづく観察記録の方法―“物語”としての観察，記録」『ソーシャルワーク研究』41(1)，相川書房，42-50.（2015 年 3 月）
6. 荒井浩道（2014）「社会福祉士養成教育における『ソーシャルワーク』の可視化―テキストマイニングによる教科書の探索的分析」『ソーシャルワーカー』13，21-30.（2014 年 6 月）
7. 荒井浩道（2013）「ソーシャルワークにおける困難事例の支援方法に関する質的研究―ナラティヴ・アプローチ，ICT，テキストマイニング」『老年社会科学』35(1)，67-75.（2013 年 4 月）

〔学会発表〕（計 5 件）

1. 荒井浩道「ピアサポートの言語的営み―自由な語り，当事者性，技法」荒井浩道・相川章子・濱田由紀「ピアサポート×ナラティヴ―『経験の語り』を差し出すことによる支え合い」（第 5 回ナラティヴ・コロキウム）.（2017 年 3 月 5 日，駒澤大学深沢キャンパス［東京都世田谷区］）
2. 荒井浩道（企画・司会）・安達映子・伊藤拓・松澤和正（2016）「シンポジウム―実践から研究へ／研究から実践へ」（第 4 回ナラティヴ・コロキウム）.（2016 年 3 月 6 日，駒澤大学深沢キャンパス［東京都世田谷区］）
3. 荒井浩道（2015）「オープンダイアローグ・アプローチによるピアサポートファシリテーションの可能性と課題―認知症家族会を対象としたナラティヴ分析」『日本社会福祉学会第 63 回秋季大会報告要旨集』，211-212.（2015 年 9 月 20 日，久留米大学御井キャンパス［福岡県久留米市］）

4. 荒井浩道（2014）「ソーシャルワークの『専門性』に関する実践的・理論的研究―ナラティヴ，コラボレイティヴ，オープンダイアローグ」『日本社会福祉学会第 62 回秋季大会報告要旨集』，105-106.（2014 年 11 月 30 日，早稲田大学早稲田キャンパス［東京都新宿区］）
5. 荒井浩道（2013）「〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ―認知症家族会を事例として」『第 86 回日本社会学会大会報告要旨集』，360.（2013 年 10 月 13 日，慶応義塾大学三田キャンパス［東京都港区］）

〔図書〕（計 5 件）
1. 荒井浩道（2017）「福祉の社会学」松野弘編『現代社会論―社会的課題の分析と解決の方策』ミネルヴァ書房，153-173.（2017 年 3 月）
2. 荒井浩道（2015）「ソーシャルワーカーに『専門性』は必要か？―ビギナーズラックとピアサポートを手がかり」木下大生・後藤広史・本多勇・木村淳也・長沼葉月・荒井浩道著『ソーシャルワーカーのジリツ―自立・自律・而立したワーカーを目指すソーシャルワーク実践』生活書院，129-156.（2015 年 12 月）
3. 荒井浩道（2015）「実践モデルやアプローチに関する相談援助演習―ナラティブアプローチに関する相談援助演習」一般社団法人日本社会福祉士養成校協会監修，長谷川匡俊・上野谷加代子・白澤政和・中谷陽明編『社会福祉士相談援助演習（第 2 版）』中央法規出版，220-225.（2015 年 2 月）
4. 荒井浩道（2014）『ナラティヴ・ソーシャルワーク―“〈支援〉しない支援”の方法』新泉社，1-184.（2014 年 2 月）
5. 荒井浩道（2013）「〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ―認知症家族会を事例として」伊藤智樹編『ピアサポートの社会学―ALS，認知症介護，依存症，自死遺児，犯罪被害者の物語』晃洋書房，33-68.（2013 年 11 月）

６．研究組織
(1) 研究代表者
荒井　浩道
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：60350435